

湘南の由来とエリアを探る

その9

海を渡って来た「湘南」-3

—禅宗文化がやって来た—

和田精二

9-1 はじめに

中国から禅宗文化の風にのって海を渡って来た「湘南」という呼称を考える最終回です。今回は、日本における禅僧の詩文等の創作活動がどのように活発に行われたのか、というテーマで考えてみました。中国の瀟湘湖南を指す「湘」の文字が相模湾沿岸地域の地名に登場し定着していく過程に、禅僧によって「湘」が記された詩文が貢献した、とする高瀬説にもう少しこだわってみようと思います。

9-2 瀟湘湖南からやって来た「湘」

またまた繰り返しになりますが、「湘南」という中国の地域呼称が相模湾沿岸の地域呼称として定着していく過程について述べた高瀬氏の文章を引用します。



図1 「湘」を冠した湘南の地域呼称例（高瀬氏の説を元に作成）

『相模国の「相」を「湘」に、さらに「湘南」と美化粧したものは、大陸の名勝「瀟湘」や「湘南」による詩文などから、

かの地に憧憬をもった学僧たち、ないしは、鎌倉時代からあいついで来朝した渡来僧などに始まったのではあるまいか。（略）禅僧 鉄牛道機は、相模川を「湘川」といい、また「湘浦」といっている。このほか、相模の散文によると、「湘東」「湘水」「湘岳」「湘峡」等の文字に出会う。「湘岳・湘峡」は相模国の霊山大山を言い、「湘水」は「湘水の浜」と書いて湘州の海浜を言い、「湘東」は鎌倉およびその附近を言っている。』

前回までの作業で確認できた「湘」の文字が記された詩文は、高瀬氏が示した2つの事例のみでした。その他の事例を示せず、先ほど引用した高瀬説を以て「湘南」呼称の由来を結論づけるのはあまりに乱暴です。膨大な詩文の創出があっはじめて「湘」という文字の発生確率が高まり、結果として湘南を意味する「湘」が一般化し、定着化していくわけですから、詩文関連の情報を確認しておきたいと思います。

9-3 金沢八景の名付け親は中国の禅僧

さて、今回の作業を行っているうちに、間接的に高瀬説を裏付ける事例が見つかりました。大半の人が京浜急行の駅名をイ



図2 歌川広重が描いた金沢八景の1景「瀬戸の秋月」

メージしてしまう金沢八景は、地名ではなく瀟湘八景絡みで名付けられたことは、当シリーズのその5で書きました。金沢は、中世には六浦庄（現在の横浜市金沢区のほぼ全域）と呼ばれていた武蔵国の南端の地域です。なだらかな丘陵地帯が、岩盤主体の三浦半島と接する地形が景勝地に相応しい景観を形成し、白砂青松といわれた海浜景観は松島や天の橋立に匹敵する名勝地となっていました。

葛飾北斎と庶民の人気を2分したといわれる歌川広重が金

沢の四季折々の八景を精緻な筆致で描いていますが、金沢八景の遊覧人気がピークになったのが文化・文政年間の頃、広重が八景を描いたのは天保年間（1830～1844）でした。

金沢八景ブームの火付け役は、江戸時代に清から亡命した禅の高僧 東臯心越（とうこうしんえつ・心越禅師）です。心越禅師が金沢を訪れたおりに、小高い山頂にたつ地藏院・能見堂（のうけんどう）から観た眺望の美しさに感激、「瀟湘八景」になぞらえて、金沢の景勝を八編の詩に詠みました。この詩が「金沢八景」という呼称が生まれるきっかけとなったのです。

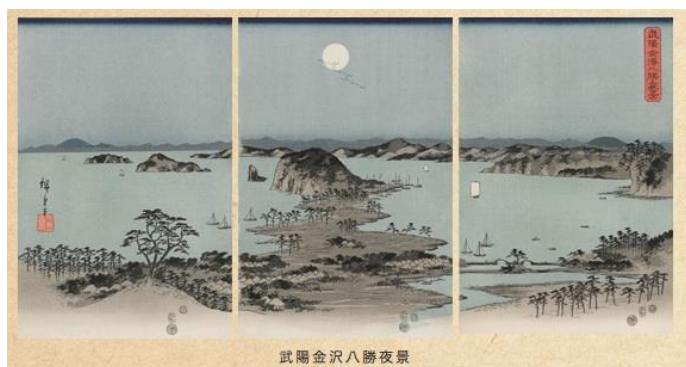


図3 歌川広重の三枚続揃物の中にある「武陽金沢八勝夜景」

南宋の官僚宋迪（そうてき）が編み出し、一世を風靡した「瀟湘八景」という絵画形式が日本に上陸し、金沢八景という名称として結実しています。（当シリーズ・その5）「瀟湘八景」に思いを馳せる禅僧が多いにも関わらず、なぜ「湘南八景」という呼称が誕生しなかったのか？「金沢八景」をとり上げながら、ふと感じた疑問ではあります。



図4 金沢八景という呼称のきっかけをつくった心越禅師

心越禅師は、1676（延宝4）年の日本亡命後、長崎の興福寺に住した後、萬福寺（黄檗宗総本山）等を訪問して諸国を歩

き回りますが、清の密偵と疑われて長崎に幽閉されます。水戸藩 徳川光圀（いわゆる水戸黄門）の尽力で釈放されたため、水戸にわたり天徳寺に住し宗教、芸術面で活躍しました。篆刻（てんこく・印章）や古琴（こきん・楽器）を日本にはじめて伝えた人物としても知られています。

9-4 金沢八景を「湘江」に例えた禅僧がいた

さて、時代をさかのぼり 1493（明應2）年、この金沢の地に、建長寺から王隠英塙（ぎょくいん えいよ）という禅僧が訪れ、『地は武相之際に跨り（またがり）、左に武陵之景八、右に湘江之景八』と、眼前に広がる景観を中国の「湘江」にたとえた詩を詠みました。王隠英塙は、鎌倉五山にあって、漢詩や書に優れた知識人として、鎌倉五山興隆の最後の時期を飾った禅僧です。相模国の海や川でなく、金沢を「湘江」に例えるとはいささかつらいものがありますが、詩文の中の「湘」探しが目下最大の関心事ですから、大変有難いことには変わりはありません。こうした事例の相模国版を探し出すことが、高瀬説の裏付けとなりますので、さらに奮闘努力です。

9-5 禅僧はなぜ詩文に夢中になるのか？

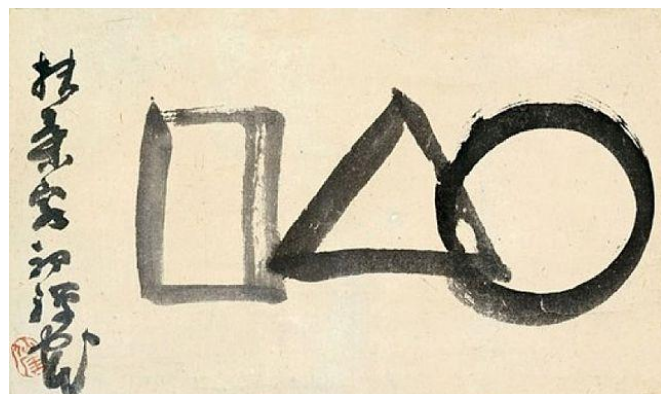


図5 禅僧仙厓が描いた禅画「○△口」図

前置きが長くなりました。中国に習って詩文を一生懸命つくったのは禅僧が最初ではありません。すでに奈良時代に、漢字の読み書きに通じた貴族の間で、中国の古典を学び、詩をつくったり漢文を書くことが盛んに行われました。

日本最古の漢詩集「懷風藻」には、官邸の中心で活動した64人の詩120首が収められており、日本の歌を集めた「万葉集」とは対照的となっています。こうした日本人の、中国を純粹視し、極度に理想化する傾向が禅僧の詩文づくりにつながってい

ったのかどうか、これから見ていきたいと思います。

詩文づくりと一緒に入って来た禅の文化は、従来の大乗仏教系の宗派や、平安から鎌倉時代にかけての浄土教系の思想と異なり、他力本願ではなくて自力本願、すなわち強く自分の内面の自立性を要求するものでした。いつ戦場で命を落とすかもしれない武士のメンタリティと禅の精神がみごとに一致した訳です。鎌倉時代になると、幕府を代表とする武家体制は、旧仏教勢力に対抗しうる勢力として禅宗を大いに利用しました。禅宗の勢力拡大を期待して、中国における禅林の貴族化を模倣し、禅僧に学問教養を求めます。宗教面に加えて学芸面が尊ばれるようになると、多くの禅僧はそれらを身に着けることに腐心し、次第に貴族・武家社会の意に適った文化・文学を創出するようになります。

やがて、幕府体制が混乱・衰微し、社会に混乱が生じてくると、当然ながら禅林にもその影響が及びます。庇護者と禅僧の関係はいよいよ親密になり、文筆活動がより一層重視されますが、求められる宗旨体得の質は徐々に低下していきます。

以上のように、日本の中世禅林における宗旨体得と文筆活動の関係は、鎌倉時代から室町時代までにたえず変化しています。禅林の文学は、宗旨の発露を示す経文・語録・公文書といった特有のものから、一般人が求める一般詩文まで様々な分野に及びます。鎌倉時代には鎌倉中心に作成され、その分量も僅かでしたが、南北朝・室町時代と時代が経つにつれ、一般詩文が中心となると共に、その分量も膨大となっていきました。

9-6 詩聖・杜甫の登場

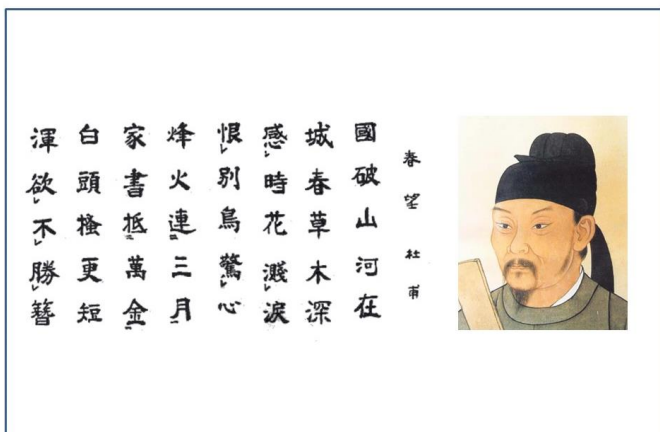


図6 詩聖と呼ばれた杜甫と代表作 春望「国破れて山河在り…」

日本における詩文の発展を調べていくうちに、杜甫が日本の禅僧に大きな影響を与えていることが分かりました。中国文学

史上最高の詩人として、李白の詩仙に対して詩聖と称された杜甫ですが、彼は「詩中の仏」と呼ばれるほど禅僧からの尊敬度が高く、詩文に取り上げられることが最も多い詩人として知られています。唐が崩壊に向かう激動期に生きた杜甫は、社会の混乱や民衆の惨状を自らの苦痛として深刻に表現、時代の実相を余すところなく歌った数々の作品が、詩による歴史「詩誌」と称されました。杜甫自身もまた、人類最高の詩人「詩聖」と称されました。40歳過ぎて仕官したものの左遷されたために官を捨て、家族と共に甘粛・四川を経て、湖北・湖南の舟旅を続ける途中、湘江付近の舟中で病死しています。禅僧の詩文に数多く引用された他、画図にも頻繁に描かれ、賛辞も沢山作られました。

9-7 芭蕉も心酔した杜甫



図7 平泉で芭蕉が詠んだ「夏草や 兵どもが 夢の跡」の句が記された平泉の高館に立つ石碑

以上の内容から発想を膨らませると、瀟湘湖南に死した杜甫が「湘」の文字と共に禅僧の詩文によみがえってくるような気がします。杜甫は、禅僧だけでなく、他の日本人の感性にも大きく受け入れられています。そのひとりが杜甫に心酔した松尾芭蕉。芭蕉の詠んだ句、「夏草や 兵どもが 夢の跡」は、杜甫の存在なしには生まれませんでした。芭蕉の表した「奥の細道」の冒頭には、杜甫の詩集「春望」から引用した文章が記されています。

『さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時のくさむらとなる。国破れて山河あり。城春にして草青みたりと、笠うち敷きて時の移るまで涙を落としはべりぬ。

夏草や 兵どもが 夢の跡 』

9-8 日本の禅林に与えた詩聖・杜甫の影響

宋の禅林における文芸の占める位置には大きなものがありました。その禅風が日本に伝わり、日本の禅林における文学志向の高まりになりました。こうした傾向を激しく批判する渡来僧も多く、蘭溪道隆（建長寺を開山）や無学祖元（円覚寺を開山）は、日本の禅僧が中国文化に傾倒するあまり、中国の文芸風潮を自らの詩文に必要以上に取り込もうとするのを厳しく批判しました。無学祖元の日本僧の文学嗜好に対する警鐘の言葉、「中国の古人の公案や言語にこだわらず、自身の心を熟視し、修養しなさい」は、つまるところ、「余計な文学書を読むんじゃない、引用もするんじゃない、ひたすら宗旨の習得に努めなさい」と翻案できそうです。

ところが禅僧たちは警鐘に耳を貸さず、すぐれた仏事法語をつくるために中国の先人の語録などに執着し続けますが、そのうち、僧の一部が中国の文芸風潮に関心を持ち、自らの文学作品をつくるべく欲求を高めていきます。渡来僧の竺仙などは、弟子との問答に杜甫の詩句、「文章は一小枝、道に於いて未だ尊ぶに足らず（文章は道を究める上で取るに足らない）」を引用し、禅僧の中国古典好みにくぎを刺しています。

しかし、貴族や武家との付き合いが増えて来ると、さらに彼らの好む文学風潮に合わせざるを得なくなります。そこで、引き合いに出されたのが再び杜甫でした。最も熟した詩をつくった杜甫は、禅にも塾していたのだ、だから、そこをきっちり証明できれば、宗旨と詩文の関係を逆転してもいいのではないかという考え方が生まれました。やがて、「禅熟すれば詩熟する」思潮が、いつの間にか「詩熟すれば禅熟する」思潮に逆転するのですが、この流れの中に、杜甫の詩句の果たす役割と価値があったといえます。

禅僧は、杜甫および彼の詩句の禅的要素を抽出し、杜詩を学べば詩と禅が一如であることを証明しようと努めたり、詩文創作の奨励などで、「詩禅一致」思想の確立に導いていきました。以上から、杜甫が日本の詩文に及ぼした影響の大きさには計り知れないものがあったことが理解できます。

9-9 さいごに

今回のテーマ「日本における禅僧の詩文等の創作活動がどのくらい活発に行われたのか」について、おおよその傾向が把

握できました。国を捨てた亡命僧が瀟湘湖南を懐かしむとき、禅僧が瀟湘湖南の名勝に思いを馳せるとき、杜甫を通して瀟湘湖南を引用するとき、そこに相模国の海や川の景色を瀟湘湖南に見立てようとする意思の営みがあれば、詩文に日本の湘南を示す「湘」が記される可能性が大きくなり、高瀬氏が指摘した、「湘川」、「湘浦」、「湘水」、「湘岳」、「湘峡」、「湘東」などの地域呼称につながって行くものと考えています。

今回の結果では高瀬説の立証に無理がありますが、今後も地道に「湘」探しを続けていく心積もりであります。 ◆

■引用図表

図1)「相模原市史/自然編」2009 掲載図に筆者が加筆修正

図2) 歌川広重、瀬戸の秋月

<http://theyokohamastandard.jp/article-5808/>

図3) 歌川広重、武陽金沢八勝夜景

<https://blogs.yahoo.co.jp/geezenstac/54150567.html>

図4) 心越禅師

<https://ja.wikipedia.org/wiki/東皐心越>

図5) 禅画○△□図

<http://blog.imalive7799.com/entry/daisengaiten-201610>

図6) 杜甫、春望

<https://ja.wikipedia.org/wiki/杜甫>

<http://nezu621.blog7.fc2.com/blog-entry-2480.html>

図7) 夏草や兵どもの夢の跡

<http://kyah.blog.jp/archives/51278547.html>

■引用文献・参考文献・参考情報

- ・禅からみた日本中世の文化と社会 天野文雄監修
-日本中世禅林における杜詩受容- 太田亨
ペリカン社 2016
- ・禅と日本文化 柳田聖山 講談社学術文庫 1985
- ・日本禅宗の成立 船岡誠 吉川弘文館 1987
- ・日本文化史講義 大隈和雄 吉川弘文館 2017
- ・神奈川の東海道(下) 神奈川東海道ルネッサンス推進協議会
2000
- ・世界大百科事典 平凡社 1988

